

色彩とハレーション

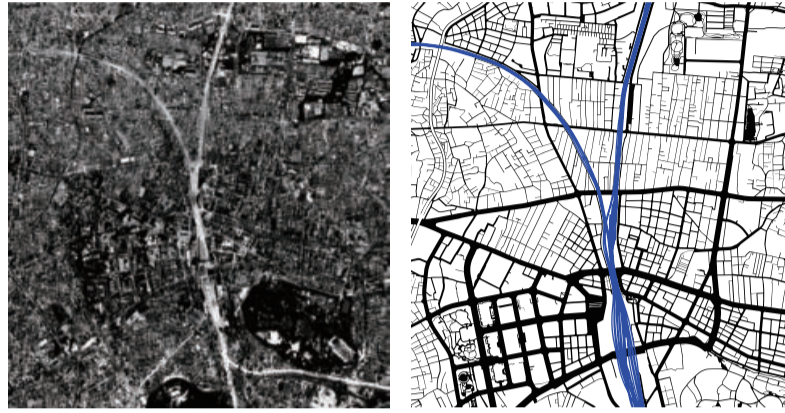
資源不足により夜間に住宅への電気が供給されることがなくなった未来の東京。しかし、東京の主要な交通機関である電車の運行においては電力の使用が認められた。暗闇の中を電車が走り抜け、車内照明が周辺環境を照らし出すといった現象が東京の新しい景色を生み、日常となった未来である。

2022年の今、夜に東京を訪れると建物の照明のみならず街灯や車、広告さまざまなモノが眩しく照らされ余剰となった光が私たちに乱暴に侵入し、生活環境はリズムを欠いているように思う。光が乱調子に飛び交う状況で電車の光は相対的に打ち消される。大きく、長く、速く、過ぎ去る「電車」という物体をも許容してしまっている状況は冷静に考えると異常なかもしれない。

夜間に電力が供給されなくなると街は静けさに返るだろう。暗く、静かな街は私たちの行動を反響させ、生活のリズムを少しずつ整えてくれるだろうが、変わらず電車は走り続ける。

電車が生む光の現象が些細なものでなくなった時、建築は人の生活にどのような可能性を与え、都市に何を放っているのだろうか。

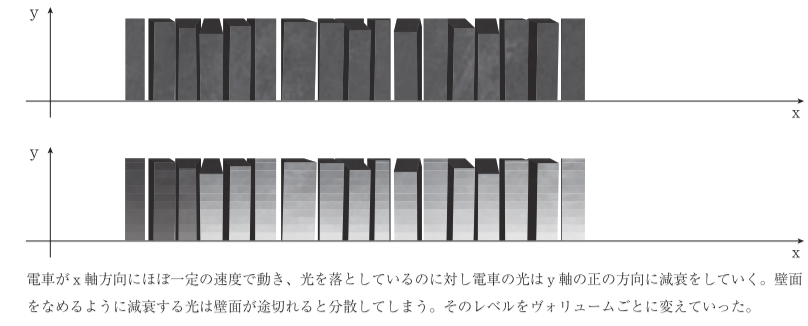
i) 敷地について



敷地は新宿駅から大久保駅を通る総武線の線路沿いである。この線路沿いに築60年近い、低層の集合住宅が100m程連なっており、この建築を改装する。共用の渡り廊下は既存の建築と線路に挟まれ夜は全く光が入らない。電車が近づいてくると徐々に光が迫り、横を通る時には眩しいほどに廊下で照らされ、電車が過ぎ去るとまた暗闇へと戻る。繰り返されるこの現象は未来の東京の風景を想起させる。



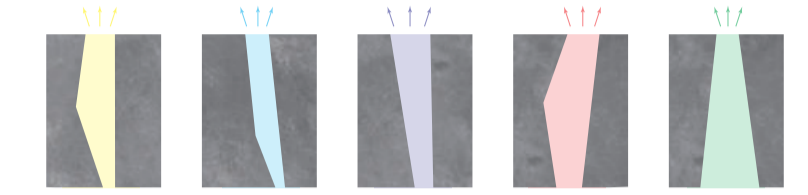
ii) ダイアグラム



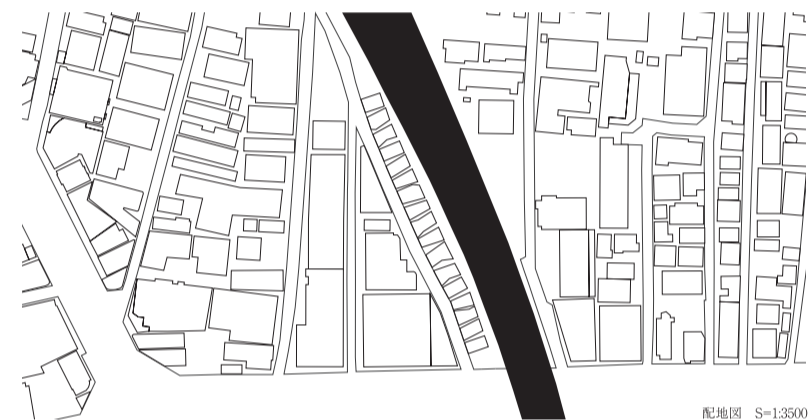
電車がx軸方向には一定の速度で動き、光を落とすとしているのに対し電車の光はy軸の正の方向に減衰していく。壁面をなめるように減衰する光は壁面が透切れると分散してしまう。そのレベルをヴォリュームごとに覚えていった。



等間隔に並ぶ電車の車庫に対して、直交するようにヴォリュームのスキマを設けた。電車の光を道にまで落とすスキマは人が利用するためのスキマではない。集合住宅としては狭いこの間隔を肯定できる建ち方を考える。

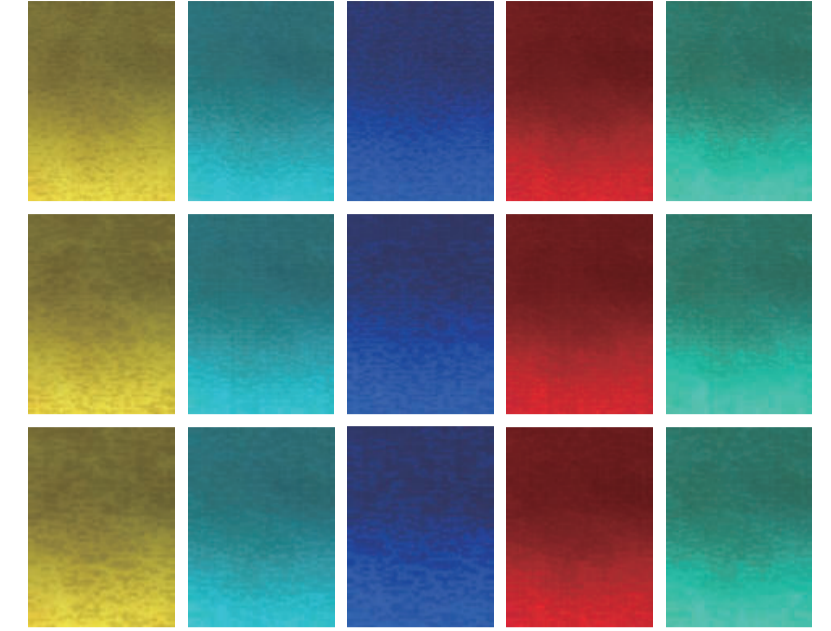


同じ色の壁面が向かい合い、挟まれば狭いほどその間の影は着色される。そこで電車の白い光にも着色するため、電車に対してスキマが直交するだけでなく壁面に光を何度かバウンドさせながら道に落とせるスキマを考えた。



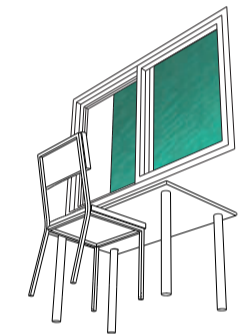
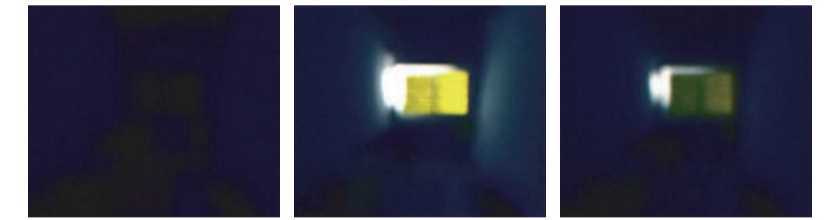
配地図 S-1300

iii) 色相と明度



電車の光を通すスキマに対して五つの色相と明度のグラデーションを持ったタイルを設置する。光が入りにくい低層ほど、明度を高くすることで反射率を上げ日中でも光を住戸に届ける。グラデーションによって外壁と電車の光の関係性が住戸によって変化し、夜の住環境に彩りをもたらす。

iv) 電車の光と日常

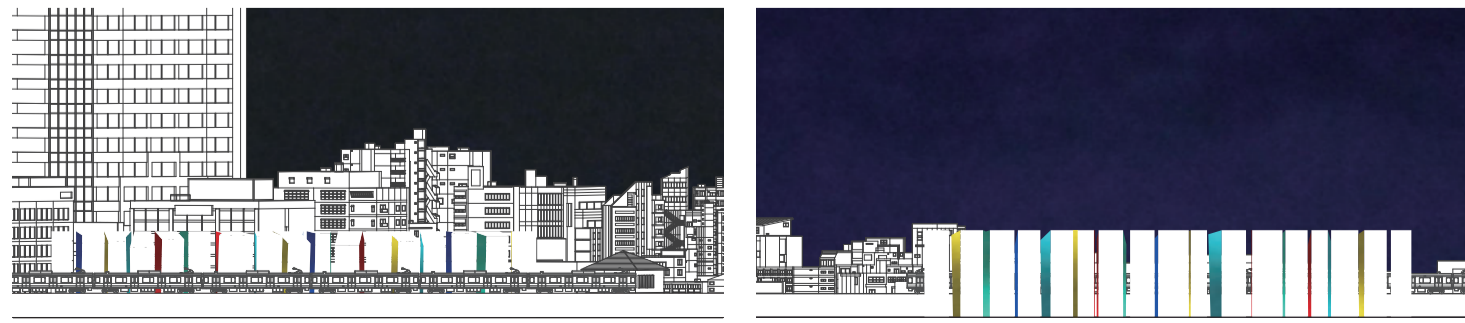


室内に光が当たっていても、往來する電車の光とそれに対応する外壁が私たちの生活を照らし、色を着けてくれるだろう。車両が通るリズムに合わせて建築の形態が動き、私たちの生活に新しいリズムを与えてくれる。光の往來を把握することが人間の時間感覚と直結した時、私たちは都市と共に眠り、都市と共に朝を迎えるだろう。そんな生活が日常になる未来を思い浮かべよう。



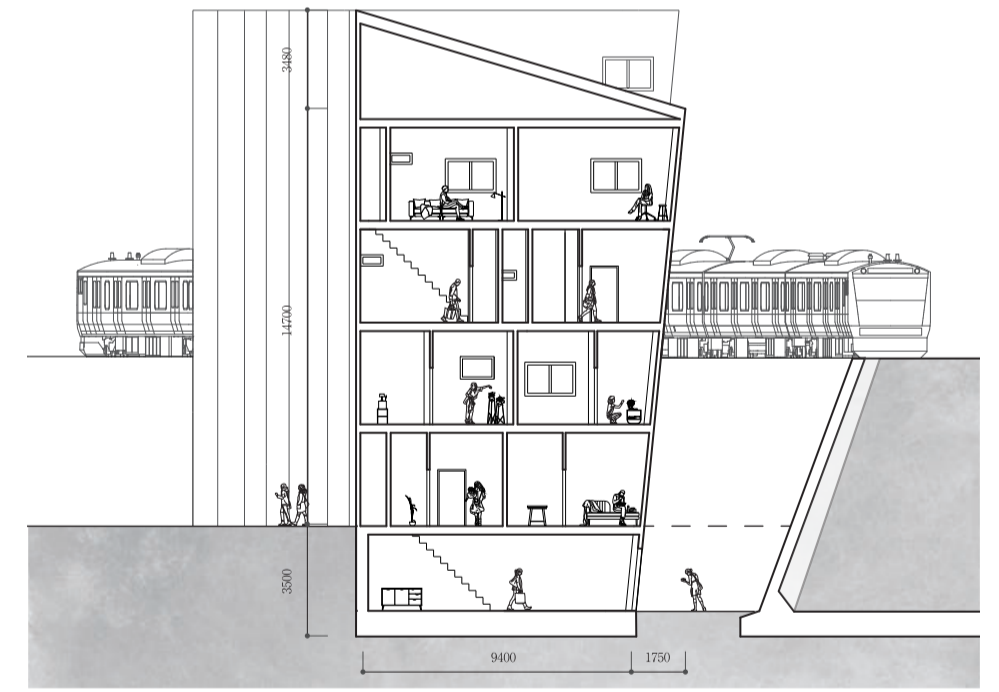
地下二階平面 S=1

17棟のヴォリュームをスキマを設けながら配置した。住戸の間口は全てスキマに対して開き、スキマに入る日光や電車の光が色相を持った外壁にぶつかりながら生活環境に入り込む。住環境に光を届けるだけでなく周辺環境にも電車の光による現象を放つため、道と線路に対しては開口は一切設けず、17棟の壁が立ち上がるようなファサードとした。すると、光が垂直方向に伸び電車の往來による現象が遠くからでも知覚できるようになる。線路沿いに建つことで、未来の景観の一部となる建築を考えた。

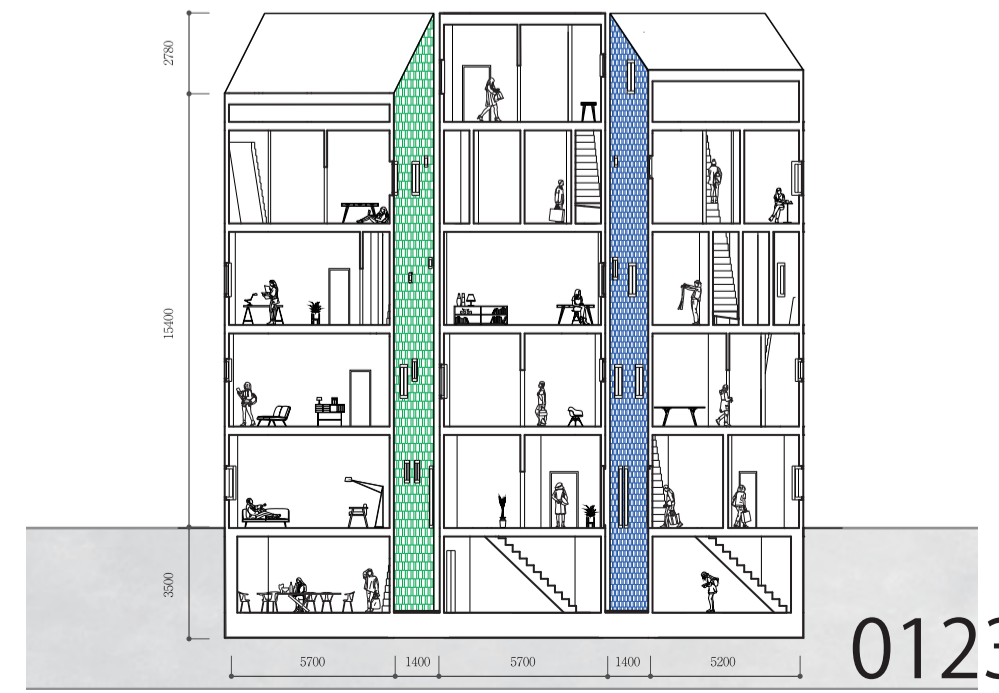


西側立面 S-1300

西側立面 S-1300



短手断面 S=1250



短手断面 S=1250